

II 高崎線沿線都市の方言調査

—大宮・熊谷・高崎の助動詞「べー」「ダンべー」を中心にして—

春日 正三

1 はじめに

大宮市は、東京都心から約30km、商業・鉄道を通じて大都市東京の影響を受ける。国鉄大宮工場（1894年）の誘致、2・3年後に営業を控えた東北新幹線の起点的中継地として急速に接近する。今日では、東京都のベッドタウン的都市である。

熊谷市は、東京都心から65km、現在のところ大都市東京の影響を受けるというよりも、県北の拠点都市的側面を保持し続けている。総武線や常磐線沿線都市と比較して、その人口増加率も低い。

高崎市は、東京都心から約100 km、大宮市とはもちろんのこと、熊谷市よりも東京都の影響は少ないといえよう。人口増加率も低い。しかし大都市東京の周辺都市として、結合関係は深まりつつある。熊谷市よりなお地域中心的性格が強い。

いうまでもなく、大宮・熊谷が埼玉県で、高崎が群馬県である。

大宮・熊谷・高崎3市における人口動態は、緩急の度合は異なるが3市とも昼間の人口指数が上昇する。このことは、この3市が周辺集落の拠点的性格の強いことを示すと同時に、周辺諸集落からの流入・流出が盛んであることを示している。

大宮市は、3市の中で比較的に世帯数と夜間人口増加率が高い。逆に昼間人口指数は低い。これは大宮が東京都民のベッドタウン的、大都市の近郊都市的性格を示すものである。他市区町村への通勤・通学率も、市域全体が40～50%以上の高さを示している。

熊谷・高崎両市は、地域の拠点都市的側面を持ちながら、多かれ少なかれの差はあるが、大都市周辺の都市的性格を強めつつある。

3市のそれぞれの都市的性格が、3市の方言変容の因でもある。各市役所内の職員の中に、他県出身者が結構おいでになる。この方言調査の当初には、3都市行政

内の各県・各地方出身者を数量的に確認し、それぞれ行政府内の職場の言語が、主としてどのような用語なのか、出身地と用語の相関関係はどうなのかを分析しながら、それぞれ3市役所内用語が、地域一般社会言語にどのように摂取され、消化され、逆に、地域言語が行政府内用語にどのように反映・摂取・消化されていくのか、地域方言を変容させていくモーメントの種々相を分析・解明し体系化を試みるつもりであった。そしてその結果の提示が、これからの地域行政の上に、または住民の生活向上発展の施策の上に少しでも役立てばと思ったのであったが、事志とは異なる結果になったのである。いずれまたその機会を作って、地域住民の方々にいささかなりとも還元出来るよう調査を深めたいと思う。

2 方言の位置

方言区画の境界を地図の上に示す線を、方言境界線という。方言境界線は、ある語または特徴ある言語事象などの存在する地域と、存在しない地域との間に引かれる具体的な境界を総合して設定するものである。この具体的な境界を設定するものが、言語地理学用語の等語線である。この等語線は重なり合う場合と、ずれる場合がある。その等語線を解釈し、考慮し、抽象的に引かれる線が、方言境界線である。

方言区画は、音韻を基準とした場合と、語彙を基準とした場合と、語法を基準とした場合の3種の基準が考えられているが、これらはそれぞれに違う相を示して厳密には一致しない。この区分基準や要素が一致しないのであるから、現在のところ客観的方言区分の境界線は存在し得ない、と言えるのであるが、研究家によって、基準の取り方、立て方、考え方を換え、解釈を施して様々に違う区画がなされている。従って今日存在する方言区画は、仮説、学説としてのみ存在する。

方言発生の原因については、大小様々な原因があるとされているが、主とする原因は、その地域社会の特殊性

によるものである。すなわち風土とそこに住む人々の言語社会の相関関係にある。相関関係は、外的な要因と内的要因に一応は区別して考えられるが、しかし、厳密にはこの二つの要素を分けることはできない。

外的要因の最大なるものは、自然環境であるし、内的要因の最大なるものは、人的環境である。この二つは、自然環境が厳しいからこそ内的要因たる地域社会の閉鎖的特殊性も存在する。ということになるであろうから、この二つはそれほど明確に識別する基準を見い出すことができない。それぞれの地域社会に住む人間の交流が、すべてを決定づけるということになる。A地域とB地域の人的交流いかに関わるものである。

ところで、方言発生の原因は、既述の通り風土とそこに住む地域住民の生活上の相関関係にあるとするのであるが、その主たる原因は、その地域社会の特殊性によるものである。その地域社会の自然地理的条件、政治、経済、行政上の他地域と相違する特殊条件が、その地域住民の生活とどのように関わったかということである。

従来言われて来た主なことは、

(1) 自然地理条件による方言対立。これには二つの大きな要因がある。すなわち (イ). 海という両地域の人的交流を妨げる大きな要因による方言対立。例えば、本土方言と琉球方言の対立、または、東部方言内における本土の東部方言と八丈島方言の相違。(ロ). 大河、高山、森林による方言対立。例えば、富士川、日本アルプスの連峰による、本土方言の本州を、東部方言と西部方言に二大別する要因、関東方言域内の利根川が、それを挟む北と南に方言を分けている。

(2) 政治行政上の条件による方言対立。これにも二つの要因がある。すなわち、(イ). 人為的、政治行政上の閉鎖的特殊社会の形成による方言対立。例えば、岩手県内の盛岡方言と一関方言、または、琉球・沖縄方言内の首里方言とその周辺方言の対立。(ロ). 住民移動とその移動した住民の閉鎖的言語形成の特殊性による方言対立、いわゆる「言語の島」を形成した方言。例えば、山梨県の奈良田方言・佐賀県の唐津方言・宮崎県の延岡方言などである。

(3) 異なる言語地域の住民が、量的にも、種類のにも、多くが同一の新しい地域に移住共同生活したことによって、新しい社会集団を形成し生じた方言。これには大・小・様々な構成要素上の相違が見られる。が、分裂・統合によって生じた最も大きい言語集団が、今日の共通語という言語集団である。この方言は、東京方言を母胎と

しながら、日本各地の方言出身者が、東京という地域にその生活基盤を求め住んだ為に形成された方言である。この共通語の東京方言を量的・地域的に最も大きい方言とすると、中間的方言が北海道地方の札幌方言であり、九州地方の福岡方言である。この方言は、それぞれの地域集団における人的交流の最も大きい地域、すなわちその地域での、政治・経済上の中心地に形成される方言である。量的・地域的に小さな方言が、琉球・奄美大島方言内に形成・変遷している、奄美大島方言的共通語である。

以上、方言の発生・分裂・統合は、大きく三つの要因とするが、方言の発生、分裂・統合はこのような単純・素朴なものではもちろんない。大小・広狭様々な人間生活と複雑なからまりを持ちながら、今日の日本方言を組織体系づけ存在させている。

言語の本質から、地域社会・人間生活の発展変遷と行を共にしながら、周辺地域方言相互間に共有する性質と、孤立的特殊の言語要素を持って、今日の日本方言が存在する。

大宮・熊谷・高崎市の方言は、日本語方言の区画からすると、東日本方言の東部・関東方言に属すると言ってよいのであるが、方言の位置についてはいろいろな学説がある。

例えば、金田一春彦(注1)「東日本→東部」(北部は省略)とし「東部」を「東京横浜」「西関東」「静岡・長野・山梨」「越後中南部」「東埼玉・房総」とし、都竹通年雄(注2)「本州東部」を「北奥羽、南奥羽、西関東、越後、ヤナシ(山梨・長野・静岡)」とし、野元菊雄氏(注3)「東日本方言の下位区分 北部(東北地方全域と関東地方のうち茨城(鹿島郡南部を除く)栃木(西南部を除く)さらに新潟を三分した北部とを合わせた地域)南部(関東地方から千葉・茨城・栃木(西南部を除く)埼玉東部を除いた部分と中部地方のうち、静岡・長野・山梨の3県と合わせた地域)」とする。

東部方言の区画については、東条操先生を初めとして、平山輝男先生・藤原与一氏・奥村三雄氏その他の方々の優れた学説が存在するがここでは一つ一つ紹介する紙数がないので省略する。いずれにしても、関東方言が東部方言に属することについては、各学説とも大体一致する。が、下位区分とその属する地域は必ずしも一致しない。

[ai], [oi], [ui], の二重母音が, [e:], [i:] になったり, [e] が [i] と混同したり, [be:] [be:] [danbe:] になったりする点は東北方言的だし, [sa]

を使用しない点では東北方言とは異なることになる。

〔zu〕〔zura〕〔ra:]〕は全く聞かれないことからすると、山梨・長野・静岡とも区分上別位置である。〔ヒ〕と〔シ〕の混乱は東京横浜方言的でもあるけれども、東京横浜方言の〔t〕が〔d〕に、〔k〕が〔g〕になるので別位置である。

結局のところ、関東方言は、大宮市・熊谷市の属する埼玉県北部と高崎市の属する群馬県方言と、山梨県・静岡県・長野県（ただし長野県は関東方言的要素と西日本方言的要素が混在している）方言と、東京・横浜を中心とする京浜方言と、神奈川県方言、それに埼玉県東南部と千葉県を含む方言、そして東北、特に南奥的要素の強い茨城・栃木方言の6種に区分されるかと思う。しかし、埼玉県北部ならびに群馬県と栃木県・茨城県の方言に、体系的相違があるわけではない。埼玉県東南部または千葉県と、大宮市・熊谷市の方言にも体系上の相違があるわけではない。それどころか、これらの地域区分の上にも、どのような、どれだけの言語的特徴やら相違やらがあるのさえ明らかにされてはいない。理想的にも、事実上でもこれらの方言区画は、本来一つであるべきものが、現在のところいくつも存するということである。

3 大宮・熊谷・高崎市の方言特色

（記述は音声レベルでの語形を示す）

共通語	大 宮	熊 谷	高 崎
①井 戸	edo	edo	edo
②絵 具	inogu	inogu	inogu
③動 く	igoku	igoku	igoku
④人 形	ningjoqko nengjo:	neng jo	neng jo
⑤人 参	nenzjin	nenzjin	nenz jn
⑥敷 く	suku	suku	suku
⑦逃 げる	nugeru	nugeru	nugeru
⑧指	ibi ebi	ibi	ibi
⑨岩	juwa	juwa	juwa
⑩鱈	juwasi	juwasi	juwasi
⑪繭	mai	mai	mai
⑫中 学 校	tʃi:gaqko	tʃi:gaqko	tʃi:gaqko
⑬牛 乳	gi:ni:	gi:ni:	gi:ni:
⑭チューブ	tʃi:bu	tʃi:bu	tʃi:bu
⑮手 術	sjizitsu	sjizitsu	sjizitsu
⑯党 首	to:sji	to:sji	to:sji
⑰歌 手	kasji	kasji	kasi
⑱菓 子	kasji	kasji	kasi

⑲白 墨	hakubaku	hakoboko	hakoboko
⑳裾	soso	soso	soso
㉑嬉 し い	urusi:	urusi:	urusi:
㉒遊 ぶ	asubu	asubu	asubu
㉓風 呂 敷	hurusiki	hurusiki	hurusiki
㉔こ ん ど	konda	konda	konda
㉕も っ と	maqto	maqto	maqto
㉖質 屋	Çitʃija	Çitʃija	Çitʃa:
㉗七	Çitʃi	Çitʃi	hitʃi
㉘竹	tage	tage	tage
㉙鷹	taga	taga	taga
㉚酒	toto sage	sage	sage
㉛柿	kagi	kagi	kagi
㉜桜	sagura	sagura	sagura
㉝自 転 車	zjidensja	zjidensja	zidensja
㉞こ こ	huko・hoko	huko・hoko	huuko
㉟心 持 ち	kogoromotʃi	hukoromotʃi	hukoromotʃi
㊱ろうそく	do:soku	do:soku	do:soku
㊲来 年	daine(re)n de:ren	dainen	dairen
㊳の ど	nozo	nozo	nozo
㊴こ れ で	konde	konde	konde
㊵やらない	jannai	jannai	jannai
㊶鮭	sjake	sjake	sjake
㊷座 敷	zjasjiki	djasjiki	zjasjiki
㊸箆	za:ru	zjaru	zjaru
㊹な で る	nazjeru	nazjeru	nazjeru
㊺痛 い	ite:	ite:	ite:
㊻無 い	ne:	ne:	ne:
㊼帰 る	kairu・keiru	ke:ru	kja:ru
㊽見 える	me:ru	me:ru	mja:ru
㊾煮 える	ne:ru	ne:ru	ne:ru
㊿暑 い	atʃi:	atʃi:	aqtʃi:
㊱寒 い	sabe: sami:(bi)	sami:(bi)	sami:
㊲軽 い	kari:	kari:	kari:
㊳瓦	ka:ra	ka:ra	ka:ra
㊴廻 る	ma:ru	ma:ru	ma:ru
㊵買 う か	ka:ka	ka:ka	ka:ka
㊶貰 う か	mora:ka	mora:ka	mora:ka
㊷雷	re:sama raisama	raisama	raisama
㊸大 き い	deke: dekai	deqke:	zunai
㊹ど なる	donaru	ganaru	ganaru
㊺威 張 る	ebaru	ebaru	ebaru

この方言の特色ある現象は、「ペーことば」である。「ペー・ダンペー」については後述するので、ここでは主として音韻的（音声レベルでの）特色を述べることにする。

イとエの混同がまずあげられる。イとエの混同現象はこの地域の方言だけではない。東北地方の大部分、栃木・茨城県の全域、千葉県の一部、そして群馬・埼玉に及んでいる。3市の50歳以上殆んどの方が識別出来ない。(しかし、多くの話者が違いを意識できるという。今後の調査に待ちたい)。イをエと言ったり、エをイと言ったりする。どちらかという、イの方が優勢である。イとエの調音点が近い関係と、エの音の出し方が狭くなる関係から、音声学的にはイとエの中間的音として聞こえてくる。e > i は、固有名詞にまで影響し、「ゆきゑ」を「ゆきい」「すみゑ」を「すみい」「しずゑ」を「しずい」とまでなっている。また、u > i, ju > i, i > ju もある。用例①～⑪⑭である。

次に、ウ列拗音 kju, sju, tju が直音化し、そして長音化する。用例⑫～⑮がそうである。そしてこの長音化現象は、用例③⑥のような広がる：までも影響している。

次は、ヒ、シの混同である。語頭音であろうと殆んどの人が ζ i である。特に高崎市内の人には識別しにくいとのことであった。用例②⑦がその代表である。

次は、カ行、タ行の子音、k, t が、語中、語尾で有声化する。用例②⑧～③がそうである。

以上の他に、u > o, o > u, o > a, za > zja, d > z, r > d, r > n 等に特色がある。

二重母音 ai の長母音化は、国語音韻史上では近世江戸語の特色であり、俗に言う「ペランメー語」とされるものであるが、この方言にも盛んである。用例④⑤～④⑨がそうである。用例④⑦は、3都市とも [raisama] であるのは面白い。

形容詞は殆んどイ段音の長音化である。用例⑤⑥～⑤⑨である。そして語幹 b と m を持つ形容詞は殆んどが m である。

このほかにも特色ある現象がある。例えば、接頭語の優勢なこととか、はねる音便やつまる音便の優勢なこと、鼻濁音のないことなどである。

待遇法としての固定的表現はないように思う。恐らく栃木・茨城・福島各県方言に近いのではなかろうか。しかし敬意表現の意識がないということではもちろんない。親愛表現やイントネーション、または文末の助詞

の添加によって敬意表現がとられている。「イギャンス」「デゴゼース」「ムシ」等がこの方言に表われる。

次に、大宮・熊谷・高崎3市に生きている2.3の方言の栄枯盛衰について触れておこう。

「ゲッピ」山梨県内にも存在するが、徒競争のときなどの最後に入ってくる走者のことである。高崎市が最も優勢である。これと同じ意味の「ペケ」は、高崎にも見られたが、大宮が優勢で、熊谷がこれに次ぎ、高崎という順である。

「シンネ(一)」「知らない」「シタク」「…のように」の意味である。この2語については東京でも大いに聞かれる。中学生や高校生それぞれ男女ともによく使われている。

東京では「シンネ」を大人の男も使用するが、「ミタク」はそれほど使用されていない。また大人の女には両語ともあまり使用されていない。

「シンネ(一)」は高崎以北の方言要素を強く感じ、「ミタク」は東京方言的要素が強い。

「ミタク」は大都市東京から運ばれていく方言で、「シンネ(一)」は、むしろ東京に運ばれてくる方言である。鉄道輸送と大に関わるものであろう。

「蟻螂」は「ハイトリ虫」が古く、「カマキリ」が新しい。「とうもろこし」は「トウギミ」または「トウミギ」であったとのことであるが、今では殆んどの人が「とうもろこし」である。

東京から高崎線によって往き来し広まっていく一方、大宮・熊谷・高崎の方言は、両毛線によって往き来し広まる方言もある。特に地勢・特産品等々の名称と関連しつつ山間部で局地的に発生した方言は、恐らくこの二つの鉄道で人と品とともに運ばれ、拡がり、散らされていく。しかしその方言の新旧・発生・拡散は様々なコースを複雑にたどるのであるから、経路・語の認定等についてはなかなか難しい。ただ新しい方言の形は、発音・文法・語彙体系などが単純に結び付くものであろうことは推測に難くない。しかし、広く、深く、周辺方言の観察・記述、そして比較の上で論じねばならないことである。

以下3方言の特色ある単語を追加してこの項を終わる。記述は音声レベルでの記述である。(×印は使わないことを示す)

共通語	大宮	熊谷	高崎
①兄	ani:	ani:	sjena
②汝	ome:esi	nisi	nisji-nisja

③こ ち ら	koqtʃi	koqtʃi	koqtʃa
④あ ち ら	aqtʃi	aqtʃi	aqtʃa
⑤あ し た	asita	asita	asita
⑥あ さ っ て	asaqte	asaqte	asaqte
⑦し や っ て	siasaqte	si jasaqte	siasaqte
⑧や の あ さ っ て	janasaqte	×	janoasaqte
⑨蜻 蛉	tonbu	tonbo	akezu
⑩蟪 蛄	gonbe:	haradatʃi	kamagiqʃo
⑪な め く じ	nameraqkuzi memeqʃuburo	dairome	dairome
⑫蝸 牛	tunonde:ro	tsunodasji	dendenmusi
⑬霜 柱	taqpe	taqpe	oriki
⑭ほ く ろ	hokuro	hokoro	kusube
⑮もの ら い	mebosi	mikeho:	janme
⑯と お も ろ こ し	tomorokosi	morokosji	to:migi
⑰馬 鈴 薯	sandoimo	zjagatoro	zjagaraimo
⑱片 足 跳	asikon	kenken	biqko•bikokaki
⑲目	manako	manaku	managu
⑳唾	sji tagi	kitagi	ta itagi
㉑い び き	ibiki	hanagura	hanagura
㉒葬 式	so:sjiki	tumurai	zja:bo
㉓墓 場	hakanba	hakanba	taqtʃo:ba
㉔穴	medo anameqko	medo	medo
㉕や ぶ	moja	moja	bosa
㉖嘘	usu soraqpe:	soraqpe	tʃiku
㉗死 ぬ	simu•sigu	sigu	sigu
㉘灰	he:	he:	aku
㉙鱗	koke	koke	kokera
㉚塩 味	sjoqpai	sjoqpai	sjoqpai
㉛て い ね い だ	teinida	mate:da	mate:da
㉜十 分 に	joteqpara taqʃuri	joqpara	joqpara
㉝で た ら め	detarame	soraqpe	gaz jaqpe
㉞ど な る	donaru	ganaru	ganaru
㉟かわ い そ う だ	mugoi	mugoi	mugoi:mogoi ojagene:
㊱ひ ど い 目 に あ う	ingamiru	ingamiru	ingamiru
㊲難 儀 す る	hidokanbe:	ingamiru	ingamiru
㊳載 せ る	tʃiqkeru iqkeru eqkeru	noqkeru	iqkeru
㊴疲 れ た	gameta	kowai	kowai
㊵大 き い	de:ke:	deqke:	zunai
㊶恥 し い	hazikasji:	hazikasi:	sjo:sji
㊷惜 しい も の	aqtamon	aqtamon	aqtaramon
㊸見 る の だ	mibe:	mirunnanda	minda
㊹ム シ	×	so:da:me	so:damusi

㊺メ ・ ガ × so:daga so:daga

4 「ペー」「ダンペー」

「行くペー」「行くダンペー」のような、いわゆる「ペー」「ダンペー」が、広く東北地方（山形県庄内方言を除く）、関東地方（東京方言では劣勢である）に使われていることは有名である。

「バイバイ言葉がなかったら、なべやつるべはどうすべい」「バイバイ言葉をやめたら借りても三百っん出すべい」と言われている「ペー」「ダンペー」は、東日本方言の代表的な方言形であると同時に、大宮、熊谷、高崎3市方言の代表語でもある。

大宮、熊谷、高崎3市の人々は、日本の共通語（現地の人々ではすべての方々が標準語と言う。しかし、標準語とはStandard languageのことなので、まだ日本語には存在しない。むしろCommon languageとしての共通語と言うべきであるので、共通語と記しておくことにする）と、自己の日常の言語を同一・同質と考えている人が多い。

鈴木和弘氏（熊谷市出身・熊谷市在住）は「熊谷市の言葉は共通語と比べて、発音や語彙の違いというのはほとんどとっていいほどないし、共通語で話す人の言葉を聞いても、苦労しないで理解できる。私の場合、生れてからずっと熊谷で育ち、熊谷で暮らしてきた。毎日接する人も熊谷の人である。毎日使っている言葉に何の抵抗もない。東京の人達と話しても、発音や語彙にそれほど差異はない。相手との会話に不自由した覚えもない。従って自分の毎日使っている言葉が、共通語と差異があるとは考えても見なかった」と語っている。

大宮市でも高崎市でも同じである。高崎市のある商店主も、「私は全国の人を相手に話してもいるから、方言なんかしゃべらない」と言われたし、大宮市の青年は、「僕今東京の会社へ毎日通っているので、方言は全く使いません」と言われる。

また、鈴木氏は「私の場合、熊谷の言葉と共通語の使い分けを友人にはできない。というよりしない」、しかし「年上の人や初対面の人と話すときは、「べえ」や「だんべえ」を使わなくなるが、親しくなってくると、つい「べえ」や「だんべえ」が出てくるのである。直そうと思ったがなかなか直らない」ということである。

「酒を飲みに行こう」と言われるより、「酒飲みに行くペー」と誘われた方が、「ぐっと親しみを感じますね」とは高崎市在住のサラリーマンのことばであった。

「ベイ」が現在のように言葉の終わりに用いられるようになったのは、江戸初期からのようで文化・文政のころにかなり広まったとされている。

「御持弓と云ものは、数弓とは覚悟が替ベイもんだぞ。先御弓一張御矢一腰丹那へあげべい。今一張と一腰ははりがへの御弓御替矢だ程に、後生一大事にひつ担ていべいぞ。又弓立は役に立たないもんだとて、捨べいと思ふな。数珠うちないと三尺手拭とを以、何とそせなかへうつかけて、腰の刀を以働べいぞ。(雑兵物語・持弓矢左衛門)

「推申た、人哉辻切だんべいな。夏のとうなかととは、定而なつの最中と云事だんべいな。尤よかんべいと思寄、抛打の熊手にまかせひつかきつじると」(清十郎追善奴誹諧1867)

「東にて都の若き商人と、その宿なる中居の女房に相馴れこの頃むつまじくたはぶれ、男三味線をひきおもしろく興ぜしも程なう帰京の頃となりぬ。女やるかたなく名残を惜しむあはれさに、何をがなとて、一しゆの三味線をつかはし、立別れんとするに女、『形見とて緒付の板をばさつくてけさ行べいか味気なの身や』」(醒睡笑・巻8～9)

「茶を立て、花を生け詞のなまりを笑ひ嘲り、姿装束をつくろひ、物にも足らぬ物ずき、柔かなる風情をきやしやとおもへることそ上方衆の意地なり。されば、東の国くせとて、何ぞ腹の立ちて内の者を叱る時、うぬが首ぶつ切つてくれべいといふを上方衆はわが首うちおとしたやいてとらせんとお申ある。誠に花車尋常やはらかにして優しくこと覚ゆれ」(可笑記)

とこれらの資料にすでに見えている。

また、1577年刊の「雑談之本」、1621年刊「広沢寺室中記」その他洞門抄物に、「…ヲクレベイト」「払ベイヤバ」「唱セラレベイナ」「(血が)タリ走ベイ」「～デ走ベイ」「見ベイ」「晴レベイ」「盛ンデ走ベイ」「云ベイ人」「志失スベイ」「在ルベイナ」「立テベイナ」「クレベイズダ」「コワカルベイ」「過分カルベイガ」「(くそ)マルベイズ」「出シ走ベイ」「済ベイ物ヲ」「謂ッベイ」「握ルベイト」「アンベイ」「云フベイト」「得ベイト」などはすでに表われている。

しかし、江戸語としてはそれほど定着するに至らなかったようである。その理由は、田舎ことば、奴ことばの代表として嘲笑の対象となったことや、平安朝以後のだみだる声、下衆の声として、「ペー」「ダンペー」の濁音が、一種のノイズ(噪音)的音価として、土着の江戸人は別として江戸開都以後の江戸人達に好まれなかった

からであろう。

「遊女がましくて来れるを(中略)いづくの人ぞと問へば、下野のものと云。言葉つき訛りてをかしければ、旅屋のなぐさみに留めて歌うたはせなどするに、歌さへぞひなびたり。いかなによ旅の殿さ、お草臥であるべいにおくわびらいだしめされい。はだけ申さうといふ。(中略)女聞てあらおせらし、山かゞちのねまり申たるよな明日は又道中だんべいに、てつべいを枕にぶつさげてめされいといふ。(中略)旅の殿さ。情ない。なんだ蚤が多くてつかんでほうばるべいにかゆくはひつかくべいよとてつつきおこす。(中略)つれないお旅人になんてまりなくてうつかきにくかるべいなどいひけるも山だしの女はつくろひたる遊女よりましじやと思ひて男も銀すこしとらせて家を立出て行」(東海道名所記巻三)

「聞きしは今。杉木宗順と云ふ京の人、江戸へ下り云ひける様は「関東は聞きしよりも見て愈々下国にて万賤しがりき。人形頑固に言葉訛りて『なでう事なき』『よろこぼひて』」など、片言計を云へるにより断聞え難し。(中略)取分け『べい』と云ひ『べら』と言ふことをかしけれ」(慶長見聞集・宗順だみたる声を笑ふ事)

「寛文のころ、外舅江戸番より庄内へ帰りて江戸表繁革のよし咄けるに、右の外曹祖母の云『江戸はさほどに繁唱になりたるや、昔初めて江戸へ大阪より下りたる頃は、よし沼のみ多かりし。(中略)(刀を売買するに)坂東声にて応答などしたらんには、畿内の聞なれぬには、喧嘩とも思ひけんかし。大阪にてはその比江戸ものを関東べい関東ざアといひて笑ひたると也』(異説区々)

(注4)

「ベイ」の意味は、推量が最も優勢で、ついで話し手の意志そして婉曲、仮定、推定、勧誘その他の意味を持っている。『雑兵物語』に用いられている「ベイ」は291語を数えるが、意味と例語(注5)の数は次のようになる。

推量	88	意志	69	婉曲	37	仮定	30
適当	19	推定	15	希望	8	勧誘	8
予想	4	予定	3	可能	3	勧告	3
必要	2	義務	2				

以下「べえ」「だんべえ」の種々相について、熊谷市平戸での臨地調査の記録を基にして述べることにする。大宮・高崎市方言も殆んど同じである。特別な語例については後述する。

「田中君、東京に行くべえ」

「田中君、東京に行こう」という勧誘の意味とのこと

である。「行くべえ」は「行くべえ」との両形があるが、数量的調査の結果は「行くべえ」が多い。最も多用される「べえ」である。年齢や世代に関係なく使用されているが、聞き手が単数の場合と複数の場合、前者に「よ」が、後者に「や」が接続する。すなわち単数のときには「行くべえよ」となり、複数のときには「行くべえや」となる。そしてこの形の使用は60歳代以上に多い。

「行くべえ」と同じ意味ではあるが、少し婉曲的勧誘の語として「行ってんべえ」がある。

「行ってんべえ」は「行って見ないか」という意味に近い。「行くべえ」より、幾分軽い勧誘の印象を表わすとのことである。この語にも年配者は「や・よ」を接続させて「行ってんべえよ」「行ってんべえや」と使い、前述「行くべえよ」「行くべえや」と同じく、前者が単数の聞き手、後者が複数の聞き手を意識する。この「行ってんべえ」に対して「行ってみっか」「行ってみねえか」が存在し、年配の女性と若い男性層に多用されている。しかし若い女性層は使わないとのことである。

「ああ、行くべえ」は「ええ、行きましょう」ということになって同意の意を表すとのことである。しかし勧誘の「行くべえ」に比較してあまり使用しない。相手の勧誘「行くべえ」につられて使用することが多い。男がときどき使う。年齢には関係がない。

「ああ、行ってんべえ」は「ええ、行ってみましょう」の意となり、男女ともに老壮年層では勧誘の「行ってんべえ」と同比率で使用するとのことである。同意の「行くべえ」は、勧誘の意味で「行ってんべえ」と聞かれて、「行くべえ」と答える人はいないが、同意の「行ってんべえ」の方は、勧誘の「行くべえ」と「行ってんべえ」のどちらにも、「行ってんべえ」と応答する人がいるとのことである。

「田中君は、東京に行ったんべか」は「田中君は、東京に行ったのでしょうか」という疑問表現である。疑問表現には、「か」「かなあ」が必ず接続するとのこと。近年では「行ったんべか」よりも「行ったん」とか「行ったんべかなあ」より「行ったんかなあ」が優勢である。「行ったんべか」は老壮年層に多い。若年層は「行ったん」「行ったんかなあ」から「行ったのかなあ」が多い。

「田中君は、東京に行ったんだんべか」

「行ったんべか」は「行ったのかなあ」を表現するのにに対して、「行ったんだんべか」の方は、「行ってしまったのだろうか」という意味を含んでいる。あらかじめ東京へ行くことが分っていて、もう行ってしまったのだ

ろうかという意味である。「行ったんだんべか」は老壮年層に多く、青年層には「行っちゃったんかな」が優勢である。そして青年層には「行ったのかな」が多用されつつある。

「田中君も東京に行くんべえ」は「田中君も東京に行くのでしょうか」という意味である。この意味と多少違いを見せる表現が「行くんだんべえ」である。「行くんべえ」は、聞き手が行くか行かないかはっきりしていないときに使い、「行くんだんべえ」は、聞き手の行くことが予想されているときに使われる。この表現は年齢層に差はないように思われるが、女性はあまり使わない。「行くでしょう」との共通語形である。

「田中君は、東京に行くだんべえ」は「田中君は、東京に行くのでしょうか」という意味であるが、「田中君は、東京に行きます(ね)」という意味でもある。話者の発言では、推量の意の表現は、聞き手が田中君ではなく、第三者的他の人である場合のときであるとのことであった。

「田中君は、東京に行くだんべえ」

この語形は、推量表現にももちろん使用されるが、あまり優勢ではない。断定に使用する方が優勢である。話者の意識では、「行くだんべえ」より「行くだんべえ」の方が、強く念を押す表現となるとのことである。従って、「行くだんべえ」を推量表現に、「行くだんべえ」は断定表現の語であると言えよう。使用年齢層・性別は、老年層（女性も同じ）の男が多い。しかし近年では、女性と若年層男性は「行ったろう」「行ったよ」を多用するとのことである。

「あすこちは、男の子べえだ」は「あそこの家は、男の子供ばかりだ」の意味である。従って今まで述べて来た助動詞「べえ」ではない。「だけ」「ばかり」の副助詞である。別項を設けて述べようかとも思ったが、紙数の都合上、そしてまた、特色ある表現だし、助動詞断定の意味となんらかのかかわりがあるように思えるのでここで述べる。

「馬鹿べえ言うない」「soraqpe (嘘)べえ言うない」

「お前の唄のレパートリーはそれべえかい」「あすこの連中は、馬鹿べえだ」という「ばかり」の意味となる。

主として年齢に関係なく男に多用される。しかし、女性の老年層には使用されているが、若年層には使用されていない。近年では「ばかり」「ばっかし」「だけ」が優勢になりつつある。

「べえ」は、五段活用終止形に接続する。例えば、既述の「行くべえ」「行くべえ」の他に「読むべえ」「書

くべえ」などがある。しかし、これまた既述の通り、動詞終止形の後に「ン」を介して接続する。すなわち「行くんべえ」「読むんべえ」「書くんべえ」である。この「はねる音」は「つまる音」とともに、関東方言の音便現象として特色ある音で、青少年層に優勢である現実から新しい方言形と言えよう。

「んべえ」は、五段活用だけではなく、一段活用、サ変、カ変の動詞、形容詞、形容動詞にも接続する。なかでもサ変、カ変は一段化の傾向が有力なので、様々な複雑な形を表わしている。

例えば、「シべえ」「シルべえ」「するべえ」「すべえ」「すんべえ」「するんべえ」となる。

カ変の場合にも、「こべえ」「くるべえ」「くべえ」「くんべえ」「くるんべえ」「きべえ」がある。

一段活用語には、その未然形に接続すると同時に、終止形にも接続する。

「みべえ」「みんなべえ」「みるんべえ」「すてべえ」「すてんべえ」「すてるんべえ」「おきべえ」「おきるべえ」「おきんべえ」である。またこの他に新しい形のひとつと見なされる、四段活用に可能の助動詞「れる」が接続融合した、可能動詞下一段型活用語の「いげべえ」「よめべえ」「かけべえ」「とれべえ」などが見られる。

形容詞、形容動詞には、「おもしろいべえ」「おもしろいだんべえ」「おもしろべえ」「おもしろだんべえ」「おもしろかんべえ」「おもしろかんべえ」「おもしろんべえ」「よかんべえ」「しずかだべえ」「しずかだんべえ」「きれいだべえ」「きれいだんべえ」等である。

助動詞にも、「させるべえ」「させんべえ」「わらわれべえ」「できたんべえ」「いったんべえ」「犬だんべえ」「そうだんべえ」などとなる。

形容詞連体形が促音便化して「さむかっぺ」「よかっぺ」なども聞かれたが、この「ぺ」「びゃ」は栃木、茨城地方の方言音であると方言生活者には意識されている。

「べえ」「だんべえ」は衰退しつつある、と言ってよいかと思う。

「だってそうだんべえ、おめえ」「ああ、そうだんべえなあ」と話されたのが、話者のA、Bの方である。そして「強い響きだものなあ」「随分荒っぽいことばだ」ともつけ加えられた。

そこで、男5人、女5人、計10人に対し、「べえ」「だんべえ」言葉を、どのように考えているかを直接聞くことができたので、その結果を述べる。

話者の方々は次の方々である。出生・生育はすべて熊

谷市である。氏名は記号で示す。

男	A	53歳	熊谷市平戸在住	不動産業
	B	34歳	" "	工 員
	C	25歳	熊谷市籠原"	保 険 業
	D	22歳	熊谷市佐谷田"	大 学 生
	E	18歳	熊谷市平戸"	高 校 生
女	a	63歳	" "	工 員
	b	48歳	" "	主 婦
	c	46歳	" "	商店勤務
	d	43歳	" "	主 婦
	e	19歳	" "	会 社 員

調査の方法は、臨地直接面接である。質問項目とそのデーターは後述する。

「べえ」「だんべえ」をよく使用すると答えた人は、A、B、C、D、d、である。ときどき使うは、E、a、b、あまり使わないは、c、e、この結果は、男性用語であり、20歳代以上の用語である。

聞き手の種類は、家族7人、友人3人、気の置けない人達との会話に多く使用する。

話し中意識の有無については、無が、A、B、C、a、b、c、たまに有が、d、e、有が、D、E、無意識の言語使用と関連する。

意識の場合は、聞き手が共通語使用4人、友人3人、仕事上1人、親しくない1人、ない1人、聞き手の指摘による。

用語が共通語（あらたまった場所）のとき、使用するかしないかは、使用しない E、b、意識し使用しない d、a、c、C。少なくなる B、D、e。変わらない A。「べえ」「だんべえ」を場によって使い分けている。

少なくなったか、多くなったか。少なくなった B、C、D、a、d。変わらない A、E、b。使用しない c。多くなった e。

汚ない（抽象的だが）言葉の意識の有無、無6人、稀には 2人、有2人。

話し手に対する意識の有無、無 A、B、E、a、e、有（若い人は使用しない方がよい）C、D、b、c、有（使うな）d。若い女性には向かないとする。

「べえ」「だんべえ」2語のうちどれを意識するか。

両形とも無A、B、前者a、後者D、E、b、c、e、両形C、無は両形をよく使っている。

消滅をどう思うか。寂しいD、仕方が無い（時の流れである）A、a、b、d、e、望む（きれいになる）C、c、不明B、E。愛着がなくなりつつある。都市化の影

響でもある。

調査地平戸の、その農村的性格が都市的性格に変貌しつつある表われと言えよう。

質問事項とそのデーター

I あなたは自分の言葉の語尾に付く「べえ」「だんべえ」を毎日使いますか。イ、よく使う ロ、ときどき使う ハ、あまり使わない ニ、ほとんど使わない

II あなたは「べえ」「だんべえ」をどんな人との会話でよく使いますか。イ、家族 ロ、親類 ハ、友人 ニ、会社の人 ホ、その他

III あなたは自分が人と会話しているとき、自分が使っている「べえ」「だんべえ」が気になったり、または気付いたりすることがありますか。イ、あまりない ロ、たまにある ハ、よくある

IV あなたが「べえ」「だんべえ」を気にされたときは、どんな人との会話のときですか。イ、家族 ロ、親類 ハ、友人 ニ、会社 ホ、共通語で話す人

V あなたは、話し相手が親しくない人や、共通語で話す人に対して「べえ」「だんべえ」を使わなくなりますか。イ、あまり変わらない ロ、相手によって違うがあまり変わらない ハ、相手によって違うが少なくなる ニ、ほとんど使わなくなる ホ、はっきり使わなくなる。

VI あなたが使っている「べえ」「だんべえ」は、子供の頃、もしくは若い頃と比べて使うことが少なくなりましたか。イ、あまり変わらない ロ、少なくなったと思う ハ、ほとんど使わなくなった ニ、多くなった

VII あなたは、自分が使っている「べえ」「だんべえ」を汚ない言葉だと思ったり、感じたりしますか。イ、あまりない ロ、たまにある ハ、よくある

VIII あなたは、自分の親や子供、または異性が「べえ」「だんべえ」を使うことに対してどう思いますか。イ、あまり気にならない ロ、若い人は使って欲しくない ハ、使って欲しくない

IX あなたは人と話しているとき、自分や相手が使った「べえ」「だんべえ」のどちらが気になりますか。イ、両方とも気にならない ロ、「べえ」の方が気になる ハ、「だんべえ」の方が気になる ニ、両方とも気になる

X 熊谷から、もし「べえ」「だんべえ」が無くなったとしたら、あなたはどう思いますか。イ、故郷の言葉が無くなるようで寂しい気がする。ロ、時代の流れだから仕方がないと思う ハ、言葉がきれいになるのだからいいと思う ニ、考えたことがない。分からない。

以上の10項目である。以下その結果を表1に示す。

5 あ と が き

近隣の大都市の設立形成が、その周辺都市群にどのように作用するか、大都市のプラス面とマイナス面が、周辺都市にどのように摂取・享受されるか、周辺都市が産業構造を変え、近代化のプロセスにおいて、新旧住民間のアンバランス的意識構造、価値観の相違、ひいては生ずるであろう生活構造上のひずみ、周辺都市地域社会の政治・経済・文化の、過去の秩序と調和がどのように欠落し、どのようにまとまっていくか、求心・遠心両面から、方言を通して観察記述したかったのである。

この報告が、事志と違ったことについては「はしがき」でも述べておいた。こうなったのは、もちろん私自身の能力の無さと怠惰のしからしむるところである。が一方では、この地の方言研究があまりなされていないことにも基因する。もちろん浅学卑才、己れを棚に上げてのことである。事実、広く、深くなされているのかも知れない。この方言研究のなされていないことについては、「方言の位置」のところでも述べておいた。

今後時間をつくり、今より更に広く、より深く調査して、この地の住民の方々の精神文化向上のこれからのために、行政機能をより効率向上のために、少しでも役立てたいと念願するものである。

この調査の基本姿勢は、大都市東京を控えて、その30、50、100km圏に位置する、しかも高崎線沿線の都市、大宮・熊谷・高崎が、どのように、どのくらいのスピードをもって変容・対応しているかを、言語を通しての観察記録であった。

この調査では、大宮・熊谷・高崎各都市の教育委員会、市立図書館、市史編集室、ならびに関係各機関にお世話になった。

また、3都市9集落、53人の話者の方々、なかでも大宮市在住の板垣時夫氏、浅見実氏、熊谷市在住の鈴木和弘氏、高崎市在住の田中英基氏、植原辰雄氏には、話者の紹介、資料の提供、等々様々な手配ご厚情をいただいた。

なおまた、前橋市在住の鈴木賢二氏にもお世話になった。ここにこのことを記して謝意を新たにす。

最後に、本稿をまとめるに当たって数多くの文献の恩恵を被った。引用した文献ならびに参照した文献は注記して謝意を表する。(敬称略)

表 1

項目 話者		I				II					III			IV					V				
		イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	イ	ロ	ハ	ニ	ホ
男 性	A	○				○	○	○	○	○	○			(い	な	い)			○				
	B	○				○	○	○			○							○			○		
	C	○				○		○	○		○						○					○	
	D	○				○		○					○			○					○		
	E		○					○					○			○							○
女 性	a		○			○	○				○							○				○	
	b		○			○					○							○				○	
	c			○				○			○					○						○	
	d	○				○						○						○				○	
	e			○					○			○						○			○		

項目 話者		VI				VII				VIII				IX				X			
		イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ
男 性	A	○				○				○				○					○		
	B		○			○				○				○							○
	C		○					○		○						○				○	
	D		○				○			○					○		○				
	E	○				○				○					○						○
女 性	a		○			○				○					○				○		
	b	○				○				○					○				○		
	c			○				○		○					○					○	
	d		○				○			○						○			○		
	e				○	○				○					○				○		

参考文献及び注

- (1) 『世界言語学概説』（研究社・金田一春彦）
- (2) 『季刊国語Ⅲ』（三省堂・都竹通年雄）
- (3) 『方言学概説』（東京堂・野元菊雄）
- (4)(5) 「抄物に現われる『ペイ』一発生一助動詞ペイと洞門抄物」（金田 弘・都立大学方言学会・昭和45年4月）と『高崎市史第三巻・資料編・雑兵物語・乾（上）・坤（下）』（高崎市役所・昭和45年3月）
- 「大宮の方言と訛言」（『大宮市史第五巻・民俗・文化財編』大宮市役所・昭和44年9月）
- 『埼玉県方言研究の概観』（池之内好次郎「国研報告書25」
- 「北埼玉・邑楽郡利根川沿岸の言語調査」（埼玉大

学国語研究会 昭和29年3月）

- 「方言の実態と共通語化の問題点 群馬・埼玉」（上野 勇『方言学講座第二巻』東京堂・昭和36年3月）
- 「関東北部における『新方言』」（佐藤高司・井上史雄・第32回日本方言研究会1981年5月）
- 『群馬県方言研究の概観』（中沢政雄「国研報告書25」）
- 『高崎の方言』（前沢辰雄・S A印刷所・昭和45年9月）
- 『上州の風土と方言』（都丸十九一・上毛新聞社・昭和52年9月）